# 会　議　録（1）

| | |
|---|---|
| 会議の名称 | 令和５年度　第２回児童発達支援センター運営協議会 |
| 開催日時 | 令和５年１１月１０日（金）<br>午後１時３０分　開会　午後３時００分　閉会 |
| 開催場所 | 教育センター　会議室 |
| 議長氏名 | 越智恵子 |
| 出席委員(者)氏名 | 越智恵子、今泉大二郎、平岡知子、野口節子、吉野隆昭、新井豊吉<br>池田拓、並木範一、清水繁、山川さおり、宮澤聖二 |
| 欠席委員(者)氏名 | 茂木陽、神山菊枝、桂川泰典、関剛規、 |
| 説明者の職氏名 | こども支援課主査　雨間元良 |
| 会議次第 | １　開会<br>２　会長あいさつ<br>　初出席委員自己紹介<br>３　議事<br>　（１）次期計画に関する意見交換（方向性等）<br>４　その他<br>５　閉会 |
| 非公開理由 | |
| 傍聴者数 | なし |
| 配布資料 | ・次第（裏面：委員名簿）<br>・入間市児童発達支援センター　令和５年度事業経過報告<br>・令和５年度　第１回児童発達支援センター運営協議会　会議録<br>その他各委員より<br>・関委員からの意見資料<br>・おもちゃ図書館について |
| 事務局職員職氏名 | 【こども支援部】部長　齋藤忠士、次長　守屋俊久<br>【こども支援課】課長　半田英樹、副主幹　青木三千代<br>主査　雨間元良、主査　松本珠美<br>指導主事　大舘信浩、主事　奥　茉莉花 |
| 関係課職員氏名 | 【こども政策室】室長　園田智滋 |
| 会議録作成方法 | 要点筆記 |

# 会　議　録（2）

| 議事の概要（経過）・決定事項 |
| --- |
| 1　本日の議題「次期計画に関する意見交換」<br>（1）入間市児童発達支援センターが担う地域の中核的機能について<br><br>いただいた意見を、令和６年度児童発達支援センターの次期計画作成の参考とする。 |

会　議　録（3）

| 発言者 | 発言内容 |
|---|---|
| | （委員及び事務局の発言が行われた部分のみ記述する） |
| 事務局 | （開会） |
| 越智会長 | （あいさつ） |
| 自己紹介 | （初めて出席した今泉委員、吉野委員、２名の自己紹介） |
| 事務局 | 議事の進行は、越智会長が議長となり進行をお願いいたします。 |
| 越智会長 | 議長を務めさせていただきます。<br>本日は１１名の委員が出席していますので、入間市児童発達支援センター運営協議会条例第６条第２項の規定により本日の会議は成立しております。傍聴人がいましたら入室をお願いします。 |
| 事務局 | 本日の会議につきましては　傍聴希望者はありませんでした。 |
| 越智会長 | 会議録署名は出席者の中から名簿順となっておりますので、今回は清水委員にお願いします。 |
| 委員全員 | （異議なし） |
| 越智会長 | これより議事に入ります。<br>議題（１）次期計画に関する意見交換を行いたいと思います。<br>本日欠席の関委員より意見をいただいておりますので、事務局から説明をお願いします。 |
| 事務局 | （資料１）関委員「入間市児童発達支援センター運営協議会資料」について説明。<br>「うぃず」は、令和２年４月に開設され、この３年間で基盤となる体制整備ができたので、次期計画においては、優れた機能性と高い機動力を発揮するために、分野を超えて動く仕組みが不可欠であると思います。そのために、<br>１、市業務と委託業務の見直し　２、保育、教育、保健担当の見直し　３、専任所長を含めた適切な人員配置の検討が必要だと思います。とのことです。 |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| 越智会長 | それでは、事前にお知らせしたように、各委員からご意見をいただきたいと思います。私、並木副会長がお話しした後に、名簿順に一周していきたいと思いますので、よろしくお願いします。 |
| 越智会長 | 私は、相談する側の親という立場で考えてお話ししたいと思います。<br>児童発達支援センターの設置検討会からずっと関わらせていただいて、いろいろなところで、多種多様の連携ができていると思います。<br>障害児の相談と言ったら「うぃず」というふうになってきて、相談しやすくなっていると思います。ただ、福祉、学校、家庭のトライアングルではなく、そこに保健も連携として入るといいと思っています。以前関委員が配布された資料のトライアングルではなくスクエアがいいと言うところに、とても共感しました。 |
| 並木副会長 | 私も「うぃず」の中核的な機能を考えたときに、関委員の資料で大事だなと思ったのは、①「幅広い高度な専門性に基づく発達支援・家族支援」と③「地域のインクルージョン推進の中核機能」です。「うぃず」が開設されて、教育と保健、福祉等の関係機関の繋がりは、以前よりもできてきたと思っています。<br>福祉と教育の子育ての一体化、この方向性に基づいて事業を運営してきた賜物だと思っています。障害福祉の相談支援という意味では、発達支援が必要と思われるこども達には、家族の支援も必要な方が少なくないです。家庭の中で難しい状況があれば、こどもの発達に結びつくことはなかなか難しいと思いますので、その意味では家族支援の強化も含めた児童発達支援センターになってほしいと思っています。<br>現状、個人個人の支援者同士が繋がっています。点と点、線と線といった繋がりが少しずつ増えてきましたが、部署と部署の繋がり、面と面の繋がり、こういった支援体制づくりに、「うぃず」がハブの役割になっていっていただければ、よりよい入間市になっていくと思います。その部分の機能強化を中核的役割として果たしてほしいと思います。 |
| 今泉委員 | 学校教育の立場でお話をさせていただきたいと思います。中核的機能ということで、この「うぃず」という施設が、果たしてどれだけ認知をされているのだろうかということが、疑問です。それは、家庭、保護者もそうですし、学校の中で |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| | も管理職はもちろん、一般教員がどれだけ「うぃず」の存在を知っているのか疑問です。まず認知を広げ、そのためには何をすればよいか、学校がするべきこともいっぱいあると思います。<br>今の学校には、発達に課題のあるお子さんがいます。その子に対する支援をどうするか非常に課題になっています。中には、医療に関わるようなお子さんもいます。どこまで広げればいいかという問題もありますが、福祉、教育、だけでなくそこに、医療的なことも含まれてくると今後良くなってくると思います。 |
| 平岡委員 | 入間わかくさ高等特別支援学校の平岡です。<br>私も、関委員の資料の児童発達支援センターの中核機能というところで、本校が一番関わっているところが、発達支援・家族支援機能かと思います。本校には、普通科、職業学科があり、発達障害のある生徒が多数います。<br>そういった生徒の家庭環境を見てみると、やはり本人だけではなく、家族全体に対しての支援がとても必要だと思います。また、こども達を支援していて、学校としてできること、行政やいろんな方と関わっていただいてできることというのは、かなり明確に分かれていると感じています。「うぃず」を中心に、様々な形で情報共有を行い、どういった支援が具体的にできるのか、さらに明確化されると良いと思います。 |
| 野口委員 | 私は、わかばの森保育園の園長の野口と申します。<br>当保育園では、最近気になるお子さんが大変多くなり、やはり保育士だけでは対応できない部分がたくさんあります。「うぃず」の児童発達支援事業である「元気キッズ」を以前から利用しているお子さんがいますが、保護者や施設の依頼に基づいて個別にアドバイスいただけるので助かっています。保育園だとどうしても集団の対応になってしまいますが、保護者から家庭ではこんな指導をしていますということをお聞きして、保育園でもできる範囲で個別の指導もしています。<br>一番気になるのはやはり保護者、家族の支援です。親はお子さんと一番接しているので、自分のお子さんの発達の遅れについて認められない。そんな親の対応を、私どもで頑張っているのですが、なかなかうまくいかないこともあります。そういった時、発達支援の方と一緒に対応していただけることもあるので、大変 |

| 発　言　者 | 発　言　内　容 |
| --- | --- |
| | 助かっています。また、相談できない保護者もいらっしゃるので、そういう親御さん達をどのように、相談・対応していくのかも課題です。 |
| 吉野委員 | 元加治幼稚園では、今話しがあったように相談に行こうと考えてもなかなか一歩踏み出すことができない保護者がいます。もし障害っていう言葉がそのこどもにかかってしまった場合に、それをずっと引きずっていかなきゃいけない、何か心の不安感とか重さとかがすごくあると思います。ですから、幼稚園でもアドバイスしながら、「うぃず」につなげていって安心して保護者が相談に行けたり、気軽にお話を聞いたりできる場所になっていただけると本当に助かります。それと、こどもの発達に障害があるにもかかわらず、放っておくような保護者の方もいますので、そういう方への対応も必要になってくると思います。<br>あと、グレーゾーンと言われるお子さんが少しずつ増えているような気がします。その場合に専門的に、何か機能的な問題があるのか、それとも生活習慣や家庭での環境を改善すればこどもたちの発達障害的なものが改善していくのか、そういう専門的な判断ができる機関があるととても良いと思います。 |
| 新井委員 | 東京家政大学の新井と申します。<br>私は、児童発達支援センターがもっと相談しやすい場になってほしい。例えば、児童発達支援センターに来てもらうというより児童発達支援センターから学校に出かけて行くということも良いと思います。また、発達障害のお子さんがとても増えてきていて、小中学校でもクラスの中に８．８％の気がかりなこどもがいると言われています。今の大学生の中にも多くの発達障害の学生がいます。その学生に聞くと、小学校の時に特段配慮はされないで苦労しています。本日配布された今年度の児童発達支援センター事業の経過報告の資料の表から見てもわかる通り発達についての相談がとても多いです。小学生の相談対応ですから、小学校の教員の専門性を高めるのはもう欠かせないわけです。<br>現状としては、保護者の方がいろいろなところで勉強して、ＰＥＣＳ（ペクス：支援の為の絵カード）を使ってほしいとか、パソコンの読み上げ機能を使ってほしいとか、テストの時間を１．３倍にしてほしいとか、別室でのテスト受験を認めてほしいとか相談があった時、話し合いがうまくいくこともあれば、それ |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| 池田委員 | を学校が嫌がりこじれてしまうこともある。それが現実です。だから、ぜひ小学校の先生の専門性を高めることに力をおいてほしいと思います。<br>本日の配布された資料の事業経過報告の資料を見ると、高校生以降の相談件数が極端に少ないようです。また、令和5年度上半期の相談件数が前年度比で1.3倍に増え、発達や療育についての内容が増加傾向です。このような統計的な推移を分析し、そして個人情報に配慮されたデータをよりオープンにすることで、どのような対策を講じていくべきか、利用者からのアンケートや第三者機関の評価等を入れながら、ＰＤＣＡサイクルを構築していくことが大事だと思いました。<br>地域の中核機能とは、利用者のみならず、保育所、学校、放課後等デイサービス、医療機関等からも頼りになる存在であり、さらにはインクルージョンに向けた施策を推進していく旗振り役を担うことが期待されます。<br>人は生まれながらに特別な存在であり、個性やこだわり、障害があっても、多様な人々で構成されるのが社会の姿だと思います。少子化が加速する時代において、１０年後２０年後も誰一人取り残されることなく、一人一人の子に役割や活躍の場があって、愛され、誰かの心の支えになって欲しいと思います。児童発達支援センターでの指導や援助が、今後バランスよく吸収されて、社会の困難を乗り越える力（レジリエンス）を導き出すことが大切かと思います。<br>障害をまだ受容できない親やグレーゾーンの相談が多いと思いますが、良好な信頼関係を築くには、やはり受容から自己決定まで、専門的な対人援助スキルというものが、支援者に求められると思います。社会への対応能力の向上や二次的な障害疾病、そういったものを予防するということも一つの役割だと思いますし、そのインフラを担っているのは児童発達支援センターだと思います。<br>次期計画に対する意見としては、この児童発達支援センターが通いやすいこと。そして通ってよかったと思われること、そして地域に開かれることだと思います。<br>児童福祉審議会を代表する立場としては、入間市の「こどもまんなか社会」を作っていかなければならない。今朝も市長と面談する機会があり、市長の強いリーダーシップと部局間を超えた連携というものが必要で、こどもたちの生活課題に寄り添う仲間を多世代に渡って増やしていく事が大事だと思いました。 |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| 清水委員 | 最後に取り組みとして、三つ提案します。<br>①親や兄弟が一息つけるレスパイトケアの充実　②中高生のためのＳＳＴ、学習支援、身だしなみ支援　③児童発達支援センターまでの送迎や移動を楽にするような支援の３点を提案します。<br>私はいくつか述べさせていただきたい。<br>一つは、保護者支援。乳幼児期、学齢期から社会参加に至るまでの各段階で必要になる相談窓口が分散していて、保護者にはどこにどのように相談機能があるのかわかりにくく、支援が受けられないケースもあると思います。そこで、児童発達支援センターがメインの窓口になり、保護者の悩み事に対して、わかりやすい相談の場所として機能していただければと思います。<br>それから支援センターのコーディネーター性も考えていく必要があると思います。発達の気になるこどものライフステージを通して支援をするためには、相談を通して本人と寄り添う。こどもにとってどのような支援が必要であるか一緒に考えていく、きめ細かなサポートが大事なのではないかと思います。<br>次は家族に寄り添い支える、子育ての拠り所としての児童発達支援センターの充実です。地域の連携を前提とした高い専門性がこの児童発達支援センターの持ち味だと思います。専門スタッフを中心とした専門的な支援と地域支援をつなげていく事が大事だと思います。<br>そして、児童発達支援センターの人材、保育士や児童指導員、心理師、作業療法士、言語聴覚士、理学療法士、それからできれば音楽療法士も加えていただければと思います。そういう専門的なスタッフによって集団のプログラム及び個別プログラムをすることによって、支援の充実が図れると思います。<br>また、家族支援では保護者同士の交流の場の促進の一つとして、ペアレントトレーニング。それにはペアレントメンターの養成と親御さんの相談支援ということが全国的にも広まっているので、より拡充していただきたい。<br>それから児童発達支援センターの専門的人材が地域に出て、市内の幼稚園、保育園、こども園、学童クラブ、小中からの要請により各施設を回り、こどもの観察、施設の職員に対する対応方法など、その専門的な知識を伝えることによって |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| | 各施設の職員の対応力が向上し、入間のこどもの支援拡充にもなると思います。<br>　最後に、切れ目ない支援、福祉と教育の両輪での発達支援の推進では、福祉関係だと個別の支援計画。それから、教育関係では学年ごとの教育支援計画シートができていて、これが、就学と進学支援シートを兼ねることで、切れ目がない支援ができると思います。保護者の引き継ぎ負担の軽減、支援情報の活用によって一般的な指導が充実すると思います。 |
| 山川委員 | 　私の親友のお子さんが障害者ですが、こどもが障害者と言われても親は受け入れられないでいました。どうやったら受け入れられるか。私はその親友に「お子さんに障害があっても、きっと助けてくれる所がいっぱいあるから、その点を見つけたら幸せになるよ。」と伝えました。今後、障害支援や発達支援が必要になってくると思います。「うぃず」がいっぱいになったときに、スタッフの数をどうするか。サービスを他に委託するかとなどよく考えて欲しいと思います。<br>　親が精神的に不安になってしまった人は結構います。だから親の指導も必要だけど、親のケアも必要になってきます。学校でのお子さんの姿と家での姿が全く違う子がいます。家では良い子だと思っていたら、学校で手をつけられない。先生から保護者に連絡が入り、親御さんと学校と放課後等デイサービスの職員とケアマネージャーが集まって学校でその子の姿を見てもらったら、本人がとても辛かったということがわかりました。意見交換は、プロフェッショナルの方が集まってやっても、まだまだ難しいことを実感しました。今後もこういうことは継続して欲しいと思います。 |
| 宮沢委員 | 　私も障害児保育に何年か関わっていました。その時と合わせて考えると、相談するポイントは、学校に入る前のこどもが一番、その次は小学校の低学年です。障害児保育に関わっていると、多くの方から「リレーなのです。」って話を聞いてきました。保育園幼稚園年代から学校へ行きます。それから中学校へ行きます。高校へ行きます。成人します。こういう流れの中でそれぞれのステージでそれぞれの人たちが関わって、どうすれば良いかを考えましょうという話をずっとしてきた。その中で、特別支援学校や就職関係の所に見学に行く仕事に携わってきました。そういう中で、就学の時に何が一番問題なのかというと、通常学級に |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| | 行くか、特別支援学級に行くか、通級なのか、いろんな制度があるけれども、そこでその親御さんをどうやって説得するか。どうわかってもらうか、その辺りが一番問題なのかと思っています。それと保護者への支援。自分のこどものことは、かわいいのだけれども、特性を認めたがらない。そういうことが、課題なのかなって思います。 |
| 越智会長 | 今、一巡しました。ここからは今出た意見や感想等に対して、聞いてみたいことなど委員の中で、自由に発言しながら、意見を交換したいと思います。 |
| 越智会長 | 親という立場で相談してきた側なので、今はすごく充実してきたと思うのと同時に、どの年代においても相談しに行くというのがとてもハードルが高いと思います。私みたいに図々しければどんどん相談しますが、今とても繊細な保護者が多く、メンタル・精神的に不安定な親御さんがとても多いです。<br>こどものことを認めたくないという気持ちもあるし、でもこの子のために何かしなきゃという気持ちもあるし、将来の不安もあるし、自分たちの生活のこともあるし。どうしたらいいのか、わからない時期があるんです。そういう中で、私はぜひ保健の部門を入れていただきたいと思います。入間市は赤ちゃん出生すると保健師が全戸訪問をしています。１歳半と３歳児健診もあって、保健師さんが関わって、ドクターもその検診で関わって、特性がある子、ちょっと親御さん大丈夫かなと思う子たちも多分チェックが入っていると思います。その頃からつき合う地域の保健師だったら、すんなり悩みが言えるのではないかなと思います。就学するとその保健師さんとは縁が切れてしまいます。でも結局は卒業して地域に戻る１８歳の時に、不登校でした、精神が病みましたと言ったら、またその地域保健の方に戻っていくので、気長に細くでもいいので、保健師が親の精神面からでもそういう子たちをずっと見守ってもらえるといいなと思います。<br>こんな私も結構シビアに落ち込んだ時期がありました。他県でしたが、１歳半健診で指摘を受け、毎月保育士さんが訪問に来ていました。２歳か３歳ぐらいの時に保育士と通園の先生と相談員が来て、「自閉症は治りません。」とはっきり言われました。「だけど、育ちは必ずありますから、一緒に頑張りましょう。」と応援してくれました。そういう方がいるということが、親の勇気になると思い |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| | ます。そういうことを言うからには、育ちを応援する力がないと言えないと思う。入間市も今は「うぃず」ができて、多種多様な連携もできてきているので、そこまではっきり言えるようになって欲しいというのをすごく感じました。 |
| 越智会長 | それでは何か他に言いたいなとか、もう少し聞いてみたいという方がいらっしゃいましたら挙手でお願いいたします。 |
| 山川委員 | 今の育ちを応援するということと、あと１８歳で切れてしまうということですが、私は今、作業所で働かせていただいているので、すごく実感します。私は教育が大切だと思います。ちゃんと指導してもらったこどもと、放っておかれて来たこどもの違いをすごく感じます。中学に行って、高校は行かなかったというところまで支援を繋いで、作業所なり、就職なり、道を選んでくることになります。私は何があってもどんなレベルの方でもどんな難しいこどもでも、できる教育は必ずあると信じていますので、その教育ができるような、入間市になって欲しいと思います。 |
| 新井委員 | ６０歳まで特別支援学校で、自閉症的にも知的にも重度な課題を抱えたこどもを中心に見てきた人間として、お話したいと思います。<br>よく「インクルーシブ」とか、「みんな一緒」という言葉が使われますが、知的な困難が強く、重度な行動障害のある人のことは、皆さんの頭の中に入っているのか疑問に思います。「みんな一緒」という言葉は、知的に高い子を中心にお話されているような気がします。強度行動障害と言われる人達がいますが、その人達の中にはどんなに手を尽くしてもそうなってしまう人も一定数いる。けれど、その多くは教育現場で作られているのです。本当はその子に合った集団、その子に合った方法があるけれど、みんなと同じ、この教室の中にこの時間は居てねと、同じ勉強についてきてねということで、無理をさせられてきている。そして今は入所施設で、なかなか厳しい環境にいることがほとんどです。そこをぜひ理解していただきたい。<br>幼稚園に上がると集団指導が増えたり、小学校に上がると教科学習が出てきたり、先生は１人で３５人のクラスを見なければいけない。中学校に上がったら部活があり、上下関係も出て、受験もあり、もうその子に合った支援とかその子に |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| | 合った集団ではなくなる。全部が同じ集団にいられない人だっています。そういうことを理解していただきたい。学校や幼稚園の先生の話を聞くと、「みんなと一緒にいられないと将来困るから」という発想がありますが、その結果、強度行動障害になっているっていうことをぜひ理解していただきたい。その子に合った多様な教育と場所と、それから適切な人数があることも理解していただきたい。<br>今、知的に遅れのない大学生と一緒に私は勉強していますが、大きな教室に入れない学生さんもいます。聴覚過敏があるなど、ぜひそういうことを認めていただきたい。そういう気持ちで小中高の先生方は、こどもに接していただきたいということをお伝えしたいと思います。 |
| 並木副会長 | 私も仕事を始めた当初は、知的に重度な課題を抱えた方の施設で、強度行動障害というような方が多い施設で働いていました。１０年ぐらい前から相談支援という業務につき始めて、平成２４年に放課後等デイサービスというサービスが始まって、障害児のこどもたちとの関わりが出てきました。その当初のサービスを利用している方は、いわゆる知的障害の方、また脳性麻痺をはじめとした身体障害の方々でした。でもここ５年ぐらいで発達障害、軽度知的障害、グレーゾーンやいわゆる境界児という方々との関わりが非常に多くなりました。私がそこに問題意識を持ち始めたのは本当にここ５年ぐらいの話です。それが社会状況の変化やいろんな世の中のあり様が変わってきて、今までそれほど目立たなかったこどもたちが、何らかの事情で力を伸ばすことができずに、少しずつ目立ってきているのかなと思っています。それを家庭環境だけで補うことは、もう無理なのではないかなと。ですからそれを地域や行政の力など何かで補わない限りこの流れは止まっていかずに、より広がっていくのではないかと思っています。<br>皆さんはこどもたちに関わる専門職の方々です。この世の中のあり様や変化等感じられることがあれば教えていただきたい。もしあるのであれば、その変化に対応した組織や体制を作らなければ、抗っていくことはできないと思います。 |
| 池田委員 | 今、こどもの意見を聞きましょうと言われますが、こどもの領域の制度とか仕組は高齢者に比べて遅れていると思います。私たちは、高齢になった時の暮らしのことは簡単に想像できますが、言葉や知恵が未発達なこどもは、意見表明が難 |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| | しいわけです。そういったことを早く気づいてあげる大人を増やさなくてはいけないと思っています。<br>　例えば国際標準であるＩＣＦ国際機能分類です。国際的な障害の機能分類は、駄目なところを発見する仕組みではなくて、良い所を見つける仕組みであるわけです。こういうことができなくてもこの人には素晴らしい仲間がいる、医療機関にも繋がっている。さらに、介護施設の現場では、お世話する介護から、治す介護が今注目を浴びています。新たに自立支援加算というのが介護報酬に加わり、寝たきりやおむつから脱却する支援に対して介護報酬が加算されます。しかし、こどもの世界はそういうのがありません。できない事に対する支援をどんどん手厚くしたり、専門職や相談員を増やしたりするのには限界があります。全国的に発達が気がかりなお子さんは増える傾向があり、この数値を減らすことは、一つの自治体では難しいわけです。そうであれば、介護のように自立して社会復帰する支援というのは、利用者のウェルビーイングを向上させることになるので、家族にとっても、大人にとっても、ひいては学校の先生にとってもメリットが高いというふうに考えることが、インクルーシブの始まりかなと思います。その様な機運を広げていくことが、並木委員のお話から私が考えたことです。 |
| 平岡委員 | 　私は、入間わかくさ高等特別支援学校コーディネーターとして、入間市の要保護児童対策協議会に出させていただいています。出生から１８歳になるまで、虐待であるとか、見守りが必要なこども達について会議を行っていますが、このコロナ禍で変わってきたと思うのは、中学校を卒業して以降の所属先がない事です。引きこもりと言われているこどもたちがとても多く、毎月会議をやっていて減らない。むしろ増えています。そういった情報が、当市では把握されていますが、それ以外の場所ではなかなかそういった情報が入りません。<br>　わかくさに不登校の状態で入ってきたこどもについて、家庭に支援を入れたいけれどもどうしてもうまくいかないので、相談支援の方の力を借りることも増えています。所属があれば手を差し伸べる事ができるけれども、そういった所属のないこどもたち、これからずっと入間市で生活していくこどもたちにどうアプローチしていくのかというのが一つ大きな課題だと思っています。 |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| 越智会長 | 「うぃず」を立ち上げる前の設置検討会議から始まり、運営協議会に移行して「うぃず」の中核機能というところがすごく進んできたと実感しています。今、懸念されるのは、児童発達支援の事業を業務委託にしていることで、今後、事業所の方針が全く違うというところが受託すると、こどもたちが一番大変だと思います。今現在、児童発達支援の方に通っている親御さんたちからはとても好評です。<br>私は、入間市から知的障害者の相談業務も委託されていますので、日々入間市内の親御さんからいろいろな相談があります。コロナ禍前までは重度な課題を抱えたこどもを持つ親から学校卒業後どうしよう、こういうサービスを使いたいけどどこかないかなという相談が多くありました。コロナ禍が明けてからは、こどもが学校に行きたくないと言うのでこどもを責めてしまう。親自身もこういう子に育ててしまったと自分自身を責めてしまう。そういうご家庭からの相談が、多くなってきました。<br>相談業務は「うぃず」がとても頑張っているので、今後も研修等を受けながらしっかりと相談が受けられる所にしていただきたいと思います。また、地域の障害児の発達支援の入口というところでは、随分浸透してきていると思いますので、ここの所もぜひ継続していただきたいと思います。地域の障害児通所支援事業所に対するスーパーバイズ、コンサルテーションと、地域のインクルージョンの推進は、何か巻き込むような仕掛けがないと難しいのかなと感じています。<br>うちの息子も最重度の知的障害自閉症で、てんかん発作のある子ですが、やっぱりインクルージョン・インクルーシブの中で、みんな一緒というのは、本人にとっては虐待と同じような事なのです。だから個別支援があってこその集団指導だと思っているので、何が何でもみんな一緒というのは、親の立場や意見が分かれます。インクルーシブを推し進めたい、何でうちの子ははじかれたのっていう親。重度と言われる障害がある子の親は、その子がそういう中にいても分かるわけない世界だから、別に一緒でなくても良いっていう親。だけど、一般市民向けには啓発事業やインクルージョン・インクルーシブの推進は、頑張って欲しいと思います。<br>「うぃず」だけが全部担うというよりも、保健分野等と多種多様に連携されているので、いろんな専門の所にアドバイスをもらいながら進めると良いと思いま |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| | す。教育と福祉という両輪はもう何年も前から言われていますが、以前は家庭も入っていました。保護者のメンタル的なものもあったりしてなかなかそこに家庭が入りづらい。だけど、ぜひ保健も入って、保護者も引っ張り出して、元気な家庭を入間市につくってもらいたいと思っています。 |
| 野口委員 | 小さいお子さんしか保育してないので、いろんな専門的な方のお話をここに来て、私は初めてお聞きして、大変勉強になります。<br>先ほど新井委員より、どんなこどもも無理やり集団の中に入れているというお話がありました。私たち保育士もいろんなお子さんがいて、個別に指導することもありますが、なるべくみんなと同じようにという保育になってしまいます。あまりそういうのは良くないという風に受け取りましたが、どうなのでしょうか。 |
| 新井委員 | とても大事な視点だと思います。アセスメントが大事になってきていて、そのお子さんがどういう場なら、力が発揮できるかというのは一人一人違うわけです。それを見ていくというのがまず基本になります。だからそのお子さんが大勢の中でも楽しめて、さらに個別とか小グループで時間があるとちょうどいいお子さんだったり、音だとかいろんなことでもう目がちらちらして、みんなでいるのはちょっと辛かったりとか。いろんなこどもがいて、そういうのをきちんとこちらが把握して、ちょうど良い環境を作ってあげるというのが基本です。だからその子から出発していただきたい。この授業はこのグループで、この時間は全体で、というのも枠として必要なのかもしれないけれど、この子はその時には別室にいて、時々様子を見に行こうとか、配慮は一人一人違うと思います。学生が幼稚園とか保育所に、実習に行った時に巡回に行きますが、こどもをそこに居させているだけという感じの場面に出くわすことが多いです。自閉症のお子さんは視覚優位で、目で見て判断することが得意と言われていますが、実物を見せたり、絵カードを見せたり、写真を見せたり、スケジュールを見せたりという場面に出くわさない。ほとんどが言葉による指示で、言葉を理解してないのだから言葉以外の方法でもっとわかるように伝えれば良いのにと思うけれど、やはり「みんな一緒に、みんな言葉を理解できるように」という感じが強いと思いました。 |
| 越智会長 | やはり「うぃず」に対する期待はとても大きい。現保育園の園長先生や入間わ |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| | かくさ高等特別支援学校の先生方もそうですが、一番大変な時期は就学前だと思います。その時期に「うぃず」のようなところと繋がっているか繋がっていないかというのはとても大きいと思います。<br>公立保育所は、CLM（チェックリストin三重）という支援方法で、こどもたちにとって随分保育所生活が楽になってきたというか、保育所からの相談も少し少なかったように思ったので、上手く「うぃず」の地域支援の効果が表れてきたのかなと思います。<br>近隣の市町村の児童発達支援センターの運営者や設置場所について、インターネットで調べましたが、やはり運営形態は市であったり、社会福祉法人だったりっていろいろです。知人の中に児童発達支援センターに勤めている人がいて、中核的機能とは何だろうと問い合わせたら「難しくてわからない」と言われました。やらなければいけないことも数多くあるけれども、「うぃず」としてどういうことができて、どういうことはできないのか考えていく。委託にするのか、直営でやるのか、改正案で、医療型と福祉型の一体化などもテーマにありました。身体に障害のある方は、生まれてからすぐ病院にかかって、作業療法とか理学療法も小さい頃から受けているので、設置検討委員会の時にご一緒させていただいた方は、「もうずっと小さい頃から行っている所があるから、新しくできても行くかどうかわからない。できれば、親のレスパイトという形があると嬉しい。」と言われました。<br>最近、市内に訪問看護や訪問リハビリというサービスが増えています。アウトリーチ的にそのご家庭に行って親御さんのお話を聞くとか、ちょっと買い物行ってきていいよとか、そういう方がしっくりくるのではないかと思います。そういう保護者のご意見を聞くのもいいのではと思います。<br>私は入間市で息子を育ててきました。入間市には随分いろんなことを提言して、いろいろお話をしてきましたが、それに応えてきてくれたと思います。もう一つ頑張っていただいて、親の精神面などについて地域の保健師が細く長く関わってくれるようなシステムができたらいいと思います。今回、設置検討委員会からの資料を全部引っ張り出してきて見ましたけれども、謳（うた）ったことはしっかりやってきてくれたと改めて思いました。今後、来年度からの策定に入ると |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| | 思いますが、また期待して次を持ちたいと思います。 |
| 並木副会長 | これまでは、福祉分野の支援者が学校現場に入ることが難しい状況がありました。この２、３年で入間市では連携が進んできて、我々相談支援員の立場でも、学校に伺わせていただく機会が増えてきました。学校には基本的に全てのこどもが入ってくるので、現在のこども達の実態が少しずつわかってきました。発達の個性がある、また家庭環境に問題があるお子さんがいる。学校の教員は自分たちが最後の砦だと思っていて、自分たちは必ず受け入れる立場だと言っていました。難しい状況があっても係わっていくという話をされて、すごいなと思いました。何か外部の機関でも、お役に立てることがあればいいなと思います。<br>児童発達支援という視点で、何か現状感じられていることとか、今後こうなったらいいのではないかというご意見があればいただきたいと思います。 |
| 今泉委員 | 先ほどのご意見の中にもありましたが、やはり保護者の方が相談に行こうか、どうしようかというハードルが高い。教員は、その説得をする事はすごくおこがましく感じるので、なかなかできないものです。私の年齢になれば親御さんは年下なので話ができますが、２０代の教員や子育て経験がない教員が話すことがどれだけ親の理解を得られるかと言うと、非常に疑問です。その話をすることで、かえってそれが反感や反発を招きかねません。なので、本来であれば、「うぃず」のような所につなげたいお子さんでもなかなかそういう所までいかない現状があります。なので、学校が児童発達支援センターから支援を受けられたら、ありがたいと思います。<br>中学校にはさわやか相談員が必ず配置されていますが、何か資格を持っているわけではありません。中には持っている方もいるかもしれませんが、臨床心理士の資格を持っている方が話すと、親御さんの受け入れも良いのですが・・。<br>中学校では今の時期あたりに、学校の担任とこどもと保護者で三者相談を実施します。１、２年生のうちは日頃の悩みや学習が話題になり、３年生ぐらいになるとほぼ進路相談に変わっていきます。発達に課題があるお子さんと、どのように話したら良いか、非常に大きな課題で、なかなか難しいところがあります。 |
| 並木副会長 | 私も５校の学校としか関わりがないので、全ての学校のことはわかりません |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| | が、こどもが成長していけば、どの先生も基本的に一緒になって喜び、それを保護者の方に伝えていただける。学校の先生も福祉と一緒なんだと強く思う経験が最近多くあります。福祉がそこに入っていける強みというのは、逆に我々が接続できる部分があるのだと思います。 |
| 越智会長 | そろそろ時間も来ました。今日、皆さんから多くのご意見、感想などをいただきました。ぜひ次期計画作成の際は参考としていただきますよう、よろしくお願いいたします。それでは予定されていた議事は以上になります。<br>すべての議事は終了しましたので、座長を降ろさせていただきます。<br>委員の皆様、ご協力どうもありがとうございました。 |
| 事務局 | 越智会長、議長を務めていただき、ありがとうございました。<br>委員の皆様、意見交換をありがとうございました。<br>今後の次期計画策定の参考とさせていただきます。 |
| 事務局 | その他として事務局より元気キッズの改修工事について報告させていただきます。今年度に入り、入間市の地域福祉基金を利用して元気キッズの砂場の改修及びこども用トイレの改修を行いました。砂場は、健康福祉センター開設当時から使用しており、老朽化したためそれまで使用していたものを撤去し、新しくユニット型の砂場を設置しました。トイレは、和式トイレを洋式化しました。どちらもこどもたちや元気キッズの職員に好評です。 |
| 事務局 | また、令和５年度上半期の事業実績は、お配りした資料のとおりです。<br>その他、各委員から何か確認・報告等ございますか。 |
| 越智会長 | 前回の運営協議会でお話しした「ありんこクラブ」について、本日欠席された神山委員より資料の提供がありました。私の方から代わりに説明させていただきます。<br>おもちゃ図書館をご存知ですか。図書館の隣にある児童センターアイクスの２階におもちゃ図書館があり、障害のある子も遊べるスペースがあります。そこで、ありんこクラブというのがあって、年に何回か親子教室が開催されています。あと、おもちゃや手づくりの絵本の貸し出しもあります。この運営協議会に参加してくださっている神山委員が窓口になっていますので、ご利用ください。 |

| 発　言　者 | 発　　言　　内　　容 |
| --- | --- |
| 事務局 | 事務連絡をさせていただきます。<br>今後の予定をお伝えします。次回第３回運営協議会は、令和６年３月８日金曜日、午後１時３０分から、場所は入間市健康福祉センター３階３０１会議室を予定しております。ご出席をお願いいたします。<br>それでは、並木副会長から閉会のご挨拶をお願いいたします。 |
| 並木副会長 | 皆様、長時間にわたるご協議大変お疲れ様でした。今日の皆様との意見交換の中で、いくつか印象に残りました。<br>一つは多くの皆さんからありました、家族支援、保護者支援、親へのケア。また、学校の先生をはじめとした支援者支援ということ。<br>そして、問題が大きくなる前に介入するという意味での予防的対応の視点。<br>その上、そのような体制を組んでいくには、部局を超えた対応や支援者同士の繋がり、地域のインフォーマルな支援も含めた支援との繋がり、それを縦と横で連携をしていくというところが、大事だと思いました。<br>そういった意味においては、児童発達支援事業に基づく直接支援といわゆる地域への支援、中核的な役割のところが、整理されていく必要があるのかなと思いました。<br>また次回３月８日のこの運営協議会の中で、様々な意見交換ができればありがたいと思っております。本日はどうもありがとうございました。 |

議事のてん末・概要を記載し、その相違なきことを証するためここに署名する。

令和　6年 2 月 3 日

議　長　の　署　名　　越智恵子

議長が指名した者の署名　　清水繁